

月例研究会（2020年6月24日）

『転形期芸術運動の道標

——戦後日本共産党の源流としての
戦前期プロレタリア文化運動』を
めぐる回顧と検討

立本 紘之

本報告は、報告者の近刊書『転形期芸術運動の道標——戦後日本共産党の源流としての戦前期プロレタリア文化運動』（晃洋書房、2020年）の概要を説明すること及び、同書の刊行に至るまでの流れを通して、博士論文を書籍化する際の流れ・その際起こる出来事等を広く共有することの2つを目的とした報告となっている。

同書は大正末から昭和初期の日本において、日本共産党の影響を受けた社会運動内部での「権威」の形成という視角から、プロレタリア文化運動を軸とした知識人の運動を捉えて、
①「見える」運動＝文化運動とその関係者らが、運動展開過程でどのように「見えない」党への権威を確立し、運動に自発的に参画したか。

②上記経験を経た文化運動関係者が、戦後運動へ繋がる権威・運動様式をどう確立したか。を考察するべく著された形の研究書籍である。

マルクス主義系社会運動の持つ大きな特質である「権威」に関して考える際、明確な権威を持ち運動参加者を一定の目的に導くような運動組織は、日本ではいつから自明となったのかという疑問が、戦後以降の共産党の「神話」的な語られ方の固定化過程を経て、実証的な検証をされないままになってきた現状が存在する。

それ故に同著は、戦後共産党「宮本体制」にも繋がる、戦前期プロレタリア文化運動を対象に、共産党系の社会運動における「権威」確立過程の実証的な検証を目的とするのである。

同著は全6章を通し1921（大正10）年～

1934（昭和9）年頃の時期を対象に、時系列に沿う形で戦前期文化運動の流れ、当該期の思想状況などを追いながら上記目的の実証を行い、終章で戦後の運動に触れつつ、それまでの実証を踏まえ概括と展望を行う構成になっている。

以上の内容・各章ごとの概要を説明した後、本報告の2つ目の内容の方へと話を移した。

ここでは報告者が2018年春に、出版社より博士論文刊行の話を頂いて以降の約2年近くの大まかな流れを説明する形となったが、さらに大きく分けると「出版助成」・「刊行前作業」の2つに関する説明が本報告後半の軸となる。

まず「出版助成」に関しては、報告者が応募申請した日本学術振興会「研究成果公開促進費」（学術図書）と、東京大学「学術成果刊行助成」の2つについて、募集要綱公開から申請へと至るまでの流れを、一般に公開されている情報等を元に可能な限り説明した。また実際に申請準備中起こった問題等にも触れる形を取ることで、ある程度リアリティを持って参加者各位に説明を受け止めて頂けたのではなかろうか。

次いで「刊行前作業」に関しては、2019年秋に上述後者の申請が採択されて以降、報告者が行った諸作業（カバー画像選定、デザインの確認・書籍紹介文、索引の作成・ゲラチェック他）について可能な限り説明を行った。こちらでも作業中に起こった問題、作業を終えてみての反省点などに触れる形を取ったが、こうした点を通して書籍を作成する際のリアルな流れを、参加者各位に感じて頂けたなら幸いである。

以上が本報告全体の概要となるが、書籍自体の説明に加え、その作成過程に関する説明を行うことで、博士論文刊行の際の一般的な流れに関する情報共有に多少でも貢献出来たならば、本報告は意味あるものとなったと言えよう。（たてもと・ひろゆき 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）